

研究課題：地域の記憶の継承に向けた実践的研究

－ 神戸学院大学地域研究センター明石ハウスを拠点として－

神戸学院大学地域研究センターでは、人文学部の教員らが中心となり、明石市南東部大蔵海岸沿岸の大蔵地区の地域住民との協働を目指した取り組みを行っている。これまでに稲爪神社の例大祭における参与観察調査などを通じて、地域との厚い信頼関係を育んできた。2012 年度に新たな研究・交流拠点「明石ハウス」を設け、地域の方々と定期的に交流する取り組みを開始した。2015 年度から年間 5～7 回「大蔵谷ヒューマンサイエンスカフェ（以下、HS カフェ）」を実施し、人文学部の教員や学生の研究・学修の成果を地域に還元し、また地域住民と共に学び、成長するための土台作りを進めている。

明石ハウスでは、2018 年度より新たに「地域の自画像」とは何かという点に着目し、地域社会に暮らしてきた人々の記憶を可視化する記憶のアーカイブ構築を開始した。地域の記憶やイメージは、演劇や創作など様々な媒体のアウトプットに変換しながら継承してゆくことで、より多くの人々や世代をまたいで「自画像」を共有し、継承（あるいは再生産）することができる。そこで地域を素材にした演劇の制作・上演を通じた記憶継承の実践を行うほか、写真資料を素材にした歴史の表出（写真展）なども実施している。

2019 年度は HS カフェを 7 回（5 月 22 日『新元号「令和」と明石』講師・中村健史准教授、6 月 26 日『こんばんは、夜勉（よるべん）です』講師・水本浩典教授、7 月 31 日『スコットランド：ウィスキーとツアーリズム』講師・春日雅司教授、10 月 30 日『明石と蛸、そして芭蕉』講師・関西大学非常勤講師・中村真理氏、11 月 20 日『日本語を分析してみる』講師・野田春美教授、12 月 25 日『絵画に描かれたクリスマス』講師・倉持充希講師、2 月 5 日『アタシノアカシ第 5 弾 声で届ける物語』公演・中山ゼミ 3 回生）開催した。今年度は国文学が専門の中村健史准教授の発案による「明石の文学シリーズ」の講演が全 3 回（当初 4 回の予定だったが、2 月開催予定の回が新型コロナウイルス対策により延期）開催された。本企画は 2019 年 5 月 22 日の神戸新聞朝刊に掲載され、同年 10 月 30 日開催の『明石と蛸、そして芭蕉』（講師：関西大学非常勤講師・中村真理氏）には、年度内で最多の聴講者（18 名）が集まり、盛況となった。

また 2020 年 2 月 5 日には、中山文教授のゼミ学生（人文学部 3 回生）が、自作の脚本と演出による朗読演劇を発表する『アタシノアカシ』リーディング公演を開催した。この企画は、学生たちが明石をキーワードに題材を収集して脚本を執筆し、学生間の投票により選ばれた脚本を舞台化して上演するもので、今年は 4 本の作品が上演された。上演後には、それぞれの脚本執筆者によるアフタートークが行われ、観客は演出の意図や背景などを直接質問することができた。地域の方からの地元愛にあふれるアドヴァイスなどもあり、学生と地域の方々との貴重な交流機会となった。

さらに 2019 年 6 月より、毎週火曜日にくずし字解説講座を開催した。本講座は、2019 年度より明石ハウス担当者として勤務する中村真理氏（専門は日本近世文学）が講師を務め、文化元年(1804)刊行の地誌『播州名所巡覧図絵』の明石周辺に関する記述部を参加者と読み進めている。この企画により、地域の方々が、くずし字の習得を通じて歴史資料に残る「地域の自画像」を理解し、互いの持つ明石周辺の記憶を「語り合う」機会が創出されたとの見方ができ、地域の方の関心に応えつつも、本研究の趣旨にかなった企画といえる。

一方で、毎年 10 月に開催される稲爪神社の秋の例大祭への参加は、台風接近に伴う措置で見送られ、学生が例年実施している献灯やたい、神輿担ぎ等の参与観察調査は行われなかった。各ゼミでのフィールドワークは矢嶋ゼミ（矢嶋巖准教授）、三田ゼミ（三田牧准教授）、福島ゼミ（福島あずさ講師）などで行われ、稲爪神社における写真展（夏祭り、正月の 2 回）も例年通り実施したほか、明石ハウス内での写真展示も、新たなパネルを加え、HS カフェ参加者を中心に公開した。